

一 問題

次の文章は『大鏡』の一節で、娘彰子の産んだ皇子を東宮（＝皇太子）にしたいという道長（＝殿）の本心に気づいた現東宮が、帝として即位もしないうちに東宮の退位を決意した場面である。東宮は、父三条院が亡くなってからは、使用人までもが道長に気兼ねして御所に寄りつかないなど、寂しい生活を送っていた。一方世間では、道長の娘である御匣殿と東宮が結婚するのではないかとといううわさが流れ、そのうわさを聞いた道長も、東宮が御匣殿との結婚を申し込むのではないかと心配していた。これを読み、あとの問に答えよ。

（40点）

- 1 *皇后宮にも*かくとも申したまはず、ただ御心のままに、殿に御消息聞こえむと思し召すに、むつまじうさるべき人ものしたまはねば、*中宮権大夫殿のおはします*四条坊門と*西洞院とは宮近きぞかし、そればかりを、「こと人よりは」とや思し召しよりけむ、*藏人^{くらひね}なにがしを御使にて、「1あからさまにまゐらせたまへ」とあるを、思しもかけぬことなれば、aおどろきたまひて、「なにしに召すぞ」と問ひたまへば、「申させたまふべきことのさぶらふにこそ」と
- 5 b申すを、「この*聞こゆることどもwにや」と思せど、「退かせたまふことは、さりとて2よにあらじ。御匣殿の御ことならむ」とc思す。いかにもわが心一つには、思ふべきことならxねば、「おどろきながらまゐりさぶらふべきを、おとどに案内申してなむさぶらふべき」と申したまひて、まづ、殿にまゐりたまへり。「東宮より、しかじかなむ仰せられたる」と申したまへば、殿もおどろきたまひて、「何事ならむ」と仰せられながら、3大夫殿と同じやうにぞ思しよらせたまひける。「まことに御匣殿の御ことのたまはせむを、4いなび申さむも便なし。まゐりたまひyなば、また、さやうにあやしくてはあらせてまつるべきならず。また、5さては世の人の申すzなるやうに、東宮退かせたまはむの御思ひあるべきならずかし」とはd思せど、「しかわざと召さむには、6いかでかまゐらではあらむ。いかにも、のたまはせむことを聞くべきなり」と7申させたまへば、まゐらせたまふほど、日も暮れぬ。

注

*皇后宮Ⅱ東宮の母。東宮の退位に反対していた。 *かくⅡ退位を決めたこと。 *中宮権大夫殿Ⅱ道長の四男、藤原能信。よしのぶ *四条坊門・西洞院Ⅱどちらも能信の住まい。 *藏人なにかしⅡ道長の日記『御堂関白記』みどうかんぱくきには、この時の使者は源行任だったと記されている。 *聞こゆることどもⅡ東宮が退位するとかしないと、道長の娘御匣殿を嫁に迎えるつもりだったといった、さまざまな世間のうわさ。

問一 傍線 a ～ d の主語を、それぞれ文中から抜き出して記せ。

(4点)

問二 波線 w ～ z と同じ意味・用法の語をそれぞれ次の中から選び、記号を記せ(同一記号の反復使用不可)。(4点)

ア今宵は十五夜なりけり。

イもの知らぬことな^レのたまひそ。

ウ世の中にさらぬ別れのなくもがな。

エ月の都よりかぐや姫を迎へにまうで来^レなる。

オ御身はもはや疲れさせ給ひ候ひぬ。

カかくて翁やうやう豊かになりゆく。

問三 傍線 1・2・4・6 を口語訳せよ。

(20点)

問四 傍線 3 とあるが、具体的にはどういうことを思ったのか、説明せよ。

(5点)

問五 傍線 5 の内容として最適なものを次の中から選び、記号を記せ。

(4点)

ア中宮権大夫殿が東宮のところに参上するとしたら

イ東宮と御匣殿を結婚させないということになったならば

ウ皇后宮がこれまで以上に東宮の退位に反対したとしたら

エ御匣殿を東宮に差し上げて華やかな生活をさせ申し上げたならば

オやはり東宮が退位なさるはずはないという世間のうわさどおり

問六

傍線7に使われている敬語の説明として正しいものを次の中から一つ選び、記号を記せ。

(3点)

- ア「申さ」と「まゐら」は中宮権大夫殿、「せたまへ」は殿、「せたまふ」は東宮に対する敬意を表している。
 イ「申さ」と「せたまふ」は中宮権大夫殿、「せたまへ」は殿、「まゐら」は東宮に対する敬意を表している。
 ウ「申さ」は東宮、「せたまへ」「せたまふ」は殿、「まゐら」は中宮権大夫殿に対する敬意を表している。
 エ「申さ」は殿、「せたまへ」「せたまふ」は中宮権大夫殿、「まゐら」は東宮に対する敬意を表している。
 オ「申さ」と「せたまふ」は殿、「せたまへ」は東宮、「まゐら」は中宮権大夫殿に対する敬意を表している。

出典

『大鏡』

師尹

解説

『大鏡』は平安時代後期に書かれた歴史物語である。作者は未詳。

文徳天皇の嘉祥三(八五〇)年から後一条天皇の万寿二(一一〇二五)

年までの歴史を、人物に焦点を当てて書く紀伝体で記している。雲林院の菩提講に詣でた百数十歳の大宅世継と夏山繁樹が、自分たちが見聞きしてきた出来事を若侍に語って聞かせるのを、作者が聞き書きするという形式になっている。道長の栄華が語られているが、その裏にひそむ政権の陰の部分をも描き、摂関政治に対する批判精神も見られる。同じ道長の栄華を描く歴史物語に『栄花物語』があるが、『栄花物語』は編年体で書かれ、批判精神は見られないなどの違いがある。先に成立したのは『栄花物語』の方である。また、『大鏡』の後『今鏡』『水鏡』『増鏡』と、『鏡物』と呼ばれる歴史物語が次々と書かれ、それらをまとめて『四鏡』と呼ぶ。

問題文では、リード文と「注」を参考に、東宮の置かれている状況

や、東宮、道長それぞれの思惑を把握することが必要だ。東宮といえども、時の権力者にはかなわなかつた実状に思い至ると内容が理解しやすくなる。

重要表現

※太字の意味が、文中で使われている意味です。

- ㊦2 おはします ① いらつしやる ② おいでになる
 ③ ……ていらつしやる (補助動詞)
 ㊦5 さりとも ① そうは言つても ② いくらなんでも
 ㊦9 のたまはず おつしやる・仰せられる
 ㊦10 世の中 ① 一生 ③ 機会 ④ 国家 ⑤ 俗世 ⑥ 男女の仲

問一 a 東宮は道長に退位の決意を伝えるのに「むつまじう(＝親しく)さるべき人(＝しかるべき人・ふさわしい人)」もいなかった。道長の息子である中宮権大夫に使者を送ったのである。特に親しいわけでもないのに東宮から突然呼び出された中宮権大夫殿が「おどろきたまひ」の主語である。

b 「なにしに召すぞ（＝何のために呼びになるのか）」と質問する中宮権大夫に対して答えている人物だから、東宮からの使者（＝蔵人なにがし）と考えられる。中宮権大夫の疑問に、もし東宮が直接答えているのだとしたら、「申させたまふを」など、尊敬の意が必要なところ。傍線**b**は「申す」と謙譲語しかないので、主語は東宮ではありえない。

c 傍線部の前の部分から文脈を確認すると、東宮から呼び出しを受けた中宮権大夫は『「この間こゆることどもにや』と思せど、』退かせたまふことは、さりとともよにあらじ……』と思す』とある。二つの会話文の間に「思せど」という表現がはさまれていることが主語をわかりにくくしているが、ここは、中宮権大夫と使者の会話の場面であり、「思す」という尊敬語が使われていることから、どちらの「思す」も主語は中宮権大夫である。中宮権大夫が、東宮から呼び出された理由を（この頃のうわさのことだろうか）とお思になるが、一方ではまた（退位なさることはまさかないだろう）とも思っていらっしゃるのである。

d 物語の後半部分は、中宮権大夫の相談を受けた道長があれこれ考えている場面である。道長は「（中宮権）大夫殿と同じやうに」思っているのであり（問四参照）、その内容が「まことに……」以下の部分である。よって「思せ」の主語は殿。

問二 語の識別の問題。まずは波線部の文法的意味を確認していく。

w 「にや」の「に」は断定の助動詞「なり」の連用形。「にや」は「に／や／あら／む」の「あらむ」が省略された形で、〈……だろう

か〉と訳す。断定の助動詞「なり」は、もとは「に／あり（＝である）」が変化したもので、連用形の「に」はラ変動詞「あり」を伴って使われることが多い。「に」には他に、完了の助動詞「ぬ」の連用形、格助詞、接続助詞、ナリ活用の形容動詞の連用形活用語尾、副詞の一部がある。見分け方は次のとおり。

●「に」の識別

① 断定の助動詞「なり」の連用形

- ・ 体言・連体形に接続する。
- ・ 「に／あり」と、ラ変動詞「あり」を伴って使われることが多い。

② 完了の助動詞「ぬ」の連用形

- ・ 連用形に接続する。
- ・ 「に／き」「に／けり」「に／けむ」など他の過去・完了の助動詞を伴って使われる。

③ 格助詞

- ・ 体言・連体形に接続する。

④ 接続助詞「に」

- ・ 連体形に接続する。
- ・ 連体形の下に体言が補えない。

⑤ ナリ活用の形容動詞の連用形活用語尾

- ・ 語幹の部分は独立させても主語にならない。
- ・ 上に連用修飾語をつけることができ、物事の性質や状態を表す。

⑥ 副詞の一部

- ・活用がなく、上の語と切り離せない。

x 「ならねば」の「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形。「ず」は「ず(ぞ)」「ず(ぞ)に」「ずぬ(ぞ)」「ね(ざれ)」「〇(ざれ)」と、特殊な活用をするのでしっかりと覚えておくこと。他に「ね」には完了の助動詞「ぬ」の命令形がある。見分け方は次のとおり。

●「ね」の識別

① 打消の助動詞「ず」の已然形

- ・未然形に接続する。
- ・「は」「ど」などの上にくるか、「こそ」の結びになっている。

② 完了の助動詞「ぬ」の命令形

- ・連用形に接続する。
- ・文末にあつて、文脈上、命令していると判断できる。

y 「まゐりたまひなほ」の「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形。「な」には他に禁止の終助詞、詠嘆の終助詞、副詞がある。見分け方は次のとおり。

●「な」の識別

① 完了の助動詞「ぬ」の未然形

- ・連用形に接続する。

② 終助詞(禁止)

- ・文末にあつて動詞の終止形(ラ変活用は連体形)に接続する。

③ 終助詞(詠嘆)

- ・文末および格助詞「と」に接続する。
- ・禁止の終助詞「な」とは文意で識別する。

④ 副詞

- ・禁止の終助詞「そ」と呼応し、「な……そ」の形で用いられる。

z 助動詞の「なる」は、断定の助動詞「なり」の連体形か、伝聞推定の助動詞「なり」の連体形のどちらかである。また、「なる」には他に、ナリ活用の形容動詞の連体形活用語尾、ラ行四段活用動詞「なる」の連体形もある。見分け方は次のとおり。

●「なる」の識別

① 断定の助動詞「なり」の連体形

- ・体言・連体形に接続する。
- ・〈……である〉と訳す。

② 伝聞・推定の助動詞「なり」の連体形

- ・終止形(ラ変型活用語は連体形)に接続する。
- ・人の話や音を根拠にして推定する助動詞で、〈……だそうだ・……のようだ〉と訳す。

③ ナリ活用の形容動詞の連体形活用語尾

- ・語幹の部分は独立させても主語にならない。
- ・上に連用修飾語をつけることができ、物事の性質や状態を表す。

④ ラ行四段活用動詞「なる」の連体形

- ・自立語(「成る」「実(実)が)生(な)る」など)である。

この「なる」は、「申す」という動詞に接続しているので、助動詞だとわかるが、「申す」は四段活用動詞で、終止形と連体形の形が同じなので、見た目だけではそのどちらなのか区別がつかない。そこで文脈を考えると、「世の人の申すなるやうに」と「世の人」のうわさ話をもとにして考えを進めている。よって z は伝聞の助動詞である。さて、次に選択肢の方を確認していく。

A は「十五夜」という体言に接続しているので、断定の助動詞。イは「な……そ」という禁止を表す呼応の副詞。ウ「さらぬ」の「さら」はラ行四段動詞「避る」の未然形である。未然形に接続しているので、「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形である。つまり、〈避けられない〉という意味。「さらぬ別れ」は〈どうしても避けられない別れ〉、つまり〈死別〉のこと。 E はカ変動詞「来」に接続しているので、断定の助動詞か伝聞・推定の助動詞であるが、「来」一字では未然形「こ」、連用形「き」、終止形「く」しかありえないため、ここでは終止形接続の伝聞・推定の助動詞。 O は四段動詞「候ふ」の連用形に接続しているので、完了の助動詞。 K は助動詞ではなく「豊かなり」という形容動詞の連用形活用語尾。「豊かに」までで一語である。以上から考えると、 w 「に」は断定の助動詞だから A と同じ、 x 「ね」は打消の助動詞だからウと同じ、 y 「な」は完了の助動詞だから O と同じ、 z 「なる」は伝聞の助動詞だから E と同じである。

問三 1 まずは重要語を確認する。「あからさまに」は形容動詞「あからさまなり」の連用形で、〈仮に・ちよっと〉や〈突然である〉といった意味で用いられるが、ここでは前者の意味。「まゐら」は「行

く「来」の謙讓語「参る」の未然形で、〈参上する〉と訳す。「せ」は尊敬の助動詞「す」の連用形、「たまへ」は尊敬の補助動詞の命令形で、「せたまへ」で二重尊敬（最高敬語）になっている。以上をまとめると、口語訳は〈ちよっと参上なさいませ〉となる。東宮（＝皇太子）が、いくら道長の息子とはいえ、臣下である中宮権大夫に対して最高敬語を使うのはおかしいと疑問に思う諸君もいるだろうが、会話文では対話の相手に過剰に敬語を使う場合が多いので、このような例はたくさんある。

2 「よに」は、下に打消推量の助動詞「じ」「まじ」を伴って〈まさか（……でないだろう）・決して（……でないだろう）〉という意味を表す呼応の副詞である。したがって、傍線部の訳は〈まさかないだろう〉となる。

4 まずは重要語を確認する。「いなび」は動詞「否（辞）ぶ」の連用形で〈拒否する・断る〉、「申さ」は謙讓の補助動詞の未然形、「む」は仮定・婉曲の助動詞で〈……としたら……のような〉、「便なし」は形容詞で〈不都合だ〉の意味。以上をまとめると、口語訳は〈お断り申し上げるようなことも不都合だ〉となる。道長は、できれば東宮を位から引きずり下ろして、新たに自分の孫を東宮の位につけたいと思っっている。そんなときに、今の東宮に娘の御匣殿を嫁に欲しいと言われても、本心は拒絶したいところだが、何と言っても相手は皇太子なのだから、お断り申し上げるのも具合が悪い、と思っっているのである。

6 「いかでか」は、ここでは反語の副詞で〈どうして……か（いや……でない）〉という意味を表す。「で」は打消の接続助詞で〈……し

ないで」という意味、「む」は推量の助動詞で「……だろう」という意味。以上をまとめると、口語訳は「どうして参上しないでいようか（いや参上しないわけにはいかない）」となる。

問四 傍線部は、中宮権大夫が東宮に呼び出されたと聞いた道長が、「何事ならむ（何事だろう）」とおっしゃりながらも「大夫殿と同じやうに」思ったという内容である。では、東宮に呼び出された中宮権大夫はどう思っていたのか。

中宮権大夫も、やはり最初は「なにしに召すぞ」と戸惑っていたが、やがて「退かせたまふことは、さりともしよにあらじ（退位なさることはまさかないだろう）。御匣殿の御ことならむ（御匣殿のことだろう）」という結論に至っている。リード文や「注」にあるように、世間では東宮の退位をめぐるうわさと、御匣殿との結婚のうわさの両方を取りざたされている。中宮権大夫としても、東宮に呼び出されたからにはそのどちらかだと思っただろうが、東宮が自ら位を捨てるとは考えにくく、御匣殿と結婚したいという意向を伝えられるのだろうと考えたのである。そこで中宮権大夫は、東宮のもとに出かける前に父道長に対応を相談しに行ったが、話を聞いた道長も、中宮権大夫同様、御匣殿への結婚の申し込みだろうと思っただけである。

問五 「さては」は「そうすると・そのような状態では」の意味で、「さ」は指示語である。選択肢を選ぶポイントは「さ」の指示内容なのだが、それを考えるために、まず「さては」以下の内容を確認しよう。「さては世の人の申すなるやうに、東宮退かせたまはむの御思ひ

あるべきならず」とある。「そうすると、世間の人があつたし申し上げていかうように、東宮の位を退位なさろうとお考えは起きるはずがない」と道長は思っているのである。では、「そうすると」の内容は何か。「さては」の直前の文を見ると、「まゐりたまひなば、また、さやうにあやしめてはあらせたまつるべきならず」とある。「まゐりたまひなば」の「な」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形で、未然形に接続しているから「ば」は仮定条件、「あやし」は「見苦しい」の意味。「まゐりたまひなば……」の口語訳は「もし（自分の娘が東宮のもとへ）参上なさったならば、また、そのように見苦しいご様子で生活させ申し上げるわけにはいかない」となる。リード文にあったように、東宮は使用人も寄りつかないような寂しい生活を送っているのだから、そのような状態を「あやし（見苦しい）」と言っているのである。そして、「見苦しい様子で生活させるわけにはいかない」ということは、東宮には今までとはまったく違う華やかな生活をさせてあげる、ということである。自分の娘が嫁に行った先が見苦しい、寂しい生活では娘もかわいそうだし、世間体も悪い。かといって、もし娘を嫁にやって華やかな生活をさせたならば、東宮に退位する気など起きるはずはないと、道長は心配したのである。

問六 まず傍線部の敬語を確認する。「申さ」は「言ふ」の謙讓語「申す」の未然形で「申し上げる」。「せたまへ」は、尊敬の助動詞「す」の未然形に尊敬の補助動詞「たまふ」の已然形が接続した二重尊敬である。「……なさる」の意。「まゐら」は「行く」「来」の謙讓語「参る」の未然形で「参上する」、「せたまふ」は前述の「せたま

へ」と同様、二重尊敬で、尊敬の助動詞「す」の未然形と尊敬の補助動詞の連体形である。口語訳は「申し上げなさるので、参上なさる」となる。さて、選択肢を見ると、問われているのは敬意の対象である。敬意の対象は次のように判別する

尊敬語⇨作者・話者から動作の主体に対する敬意。

謙譲語⇨作者・話者から動作の客体（動作を受ける人）に対する

敬意。

丁寧語⇨作者から読者、話者から聞き手に対する敬意。

そこで、文脈から傍線部に主体や客体を補って訳すと、〈道長が中宮権大夫に〉申し上げなさるので、〈中宮権大夫は東宮のもとに〉参上なさる」となる。「申さ」は謙譲語だから言われる中宮権大夫への敬意を、「せたまへ」は尊敬語だから言う主体である道長への敬意を、「まぬら」は謙譲語だから来られる東宮への敬意を、「せたまふ」は尊敬語だから出かけて行く主体である中宮権大夫への敬意をそれぞれ表す。

全訳

（東宮は）母皇后宮にも、こうと（退位の決意を）申し上げなさらず、ただご自分のお気持ちどおりに、殿（⇨道長）にご連絡申し上げようとお思いになれるが、（道長に取り次いでくれる）親しくふさわしい人もいらつしやらないので、中宮権大夫殿（⇨道長の四男）が住んでいらつしやる四条坊門と西洞院は、東宮の御所に近いのだよ、

それ（⇨近いということ）だけを（理由に）、「他の人よりは（頼みやすい）」と思いつきなさったのだろうか、藏人の誰それを御使者として、「ちよつと（東宮御所に）参上なさいませ」と（連絡が）あるのを、（中宮権大夫殿は）思いもかけなさらないことなので、びつくりなさって、「何のためにお呼びになるのか」と質問なさると、「（東宮は）申し上げなさいたいことがございますのでしよう」と（使者が）申し上げるので、（中宮権大夫殿は）「この頃のうわさなことだろうか」とお思いになるけれど、「（そうだとしても）退位なさることは、まさかないだろう。（道長の娘の）御匣殿（を嫁にしたいという話）のことだろう」とお思いになる。どうにも自分の一存では、考えることのできる問題ではないので、「連絡を受けてすぐに参上してお仕えしなければなりません、父大臣に事情を説明し申し上げてからお仕えしましょう」と申し上げなさって、真つ先に殿のもとへ参上なさった。（中宮権大夫殿が）「東宮から、こうこうとご命令がありました」と申し上げなさると、殿も驚きなさって、「何事だろう」とおっしゃりながら、（道長も）中宮権大夫殿と同じように（御匣殿との結婚のことだろう）とお考えになつていらつしやった。（道長は）「（東宮が）本当に御匣殿（と結婚したい）のをおっしゃったとしたら、お断り申し上げるようなことも不都合だ。もし（御匣殿が東宮のもとへ）参上なさったならば、また、そのように（今までどおり）見苦しいご様子で生活させ申し上げるわけにはいかない。また、そうして（御匣殿を嫁にやつて華やかな生活をさせて）は、世間の人があうわさし申し上げているとかいうように、東宮を退位なさろうとお考えは起きるはずがないなあ」とはお思いになるが、「そのようにわざわざ

お召しがあったからには、どうして参上しないでいようか、いや参上しないわけにはいかない。どうであつても、お話しなざることを聞かなければならないのだ」と申し上げなざるので、(中宮権大夫殿が東宮のところへ)参上なざる頃には、日も暮れてしまった。

解答

問一 a 中宮権大夫殿 b 藏人なにかし c 中宮権大夫殿 d 殿

問二 w ア x ウ y オ z エ

問三 1 ちよつと参上なさいませ

2 まさかないだろう

4 お断り申し上げるようなことも不都合だ

6 どうして参上しないでいようか(いや参上しないわけにはいかない)

問四 東宮が御匣殿との結婚を申し込むつもりなのだろうということ。

問五 エ

問六 イ